

知っているけれど遊んだことはないあなたへ

おてだま

おてだま

です!



東京  おてだま  
TOKYO OTEDAMA

# 『東京 おてたま』です

おてたまは日本の伝統的な遊び道具として、多くの子どもたちに愛されてきました。ただ高度成長期に入ると、まったく新しい遊び道具が生まれ、おてだまで遊ぶ子どもは少なくなってしまいました。

このままでは、おてだまとともにおてだまがこれまで育んできた文化も失われてしまうと、1992(平成4)年に発足したのが『日本のお手玉の会』です。

おてだまの文化とは知恵と心の伝承です。日本の生活から生まれたおてだま遊びは、自分で遊び道具“おてだま”をつくるところから始まります。そして遊びを通し、人格を形成し、人とのつながり、社会との関わりを持ってきたのです。

投げて、受ける——単純な動作は遊びの幅を広げ、誰でもできるものから、高度なテクニックを要するものまで、遊びのバリエーションは豊富。また自分で新しい遊びを創ることもできます。シンプルな遊びだからこそ、年齢はもちろん、言葉や国境を超えて、世界中で注目を集める遊びとなりつつあるのです。

また、日本国内に目を向ければ、いつでもどこでも、そして安全にできることから、近年、医療や介護の現場でも取り入れられるようになっていきます。

日本の伝統的な遊び“おてだま”には豊かな世界があります。2020年、東京オリンピック・パラリンピックが開催されますが、ぜひとも“おてだまの世界”を世界の方々に知っていただきたいと思っています。



## 『東京 おてだま』の

## さまざまな活動

『東京・おてだま』では、定期的に老人ホームを訪問したり、地域で開催されるイベントに参加するなど、地元のみなさんとのふれあいを大切にしながら、おてだまの面白さや楽しさを伝えています。



おてだまの

# 歴史



おてだま遊びは紀元前5世紀、リディア（前7世紀ごろ、小アジア西部に成立した古代王国）で誕生したとされています。その後、ギリシャを経てヨーロッパ各地へ、シルクロードを経てアジアへと伝播していきました。そして遊びながら、その遊びのスタイルやおてだまのフォルムを整えていきました。たとえば投げる物は石や木の実、動物の骨など、その地で手に入るものを使いながら独自に発展していきます。その土地で牧羊をしていれば羊のかかとの骨を使うこともありました。

聖徳太子（574-622）も幼少のころにおてだままで遊んだ

左から台湾（布製）、ホンジュラス（木の実）、イギリス（毛糸）、ウズベキスタン（羊の骨）、ミャンマー（竹製）

ようです。約1センチ角の水晶できている「石名取玉（いしなとりだま）」が重要文化財になっています。

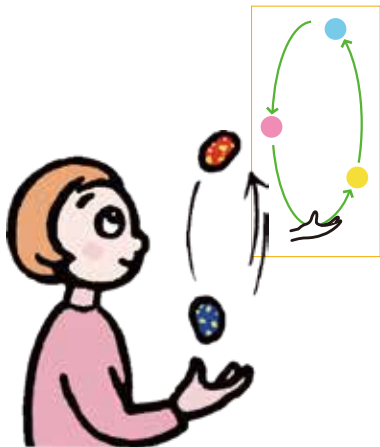
日本でのおてだまは、布製の袋に小豆や大豆、乾燥トウモロコシ、数珠玉、巻貝、クコの実といった、地域に取れる素材を入れるようになりました。近年はこれら素材に代わり、虫食いやカビの心配のないプラスチック製のペレットが用いられるようになっています。

おてだまは

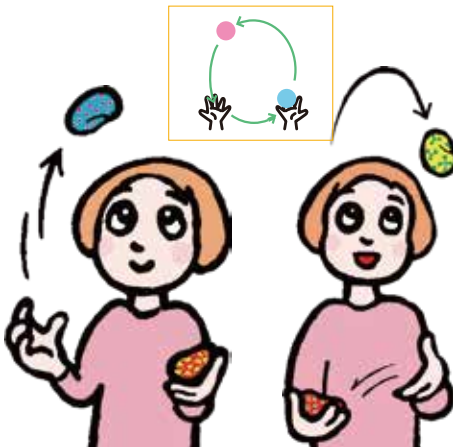
# いろいろな遊び方があるんです



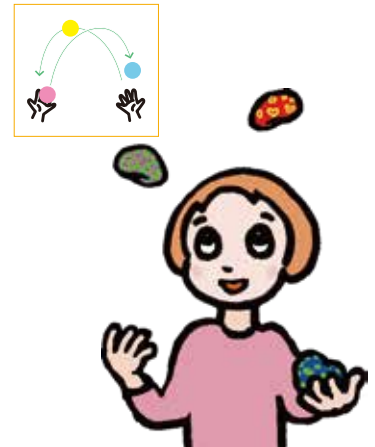
片手2個遊び  
片手3個遊び



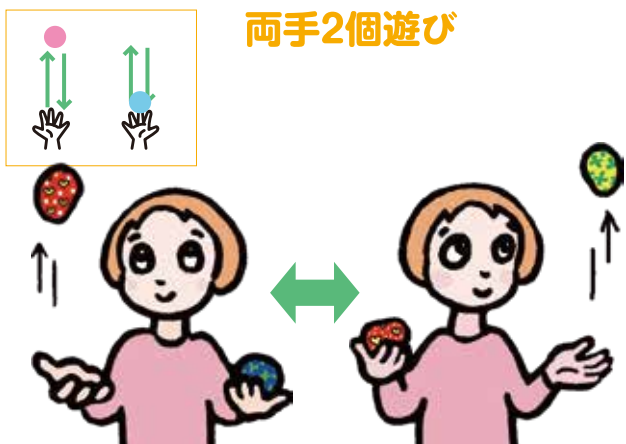
両手2個遊び



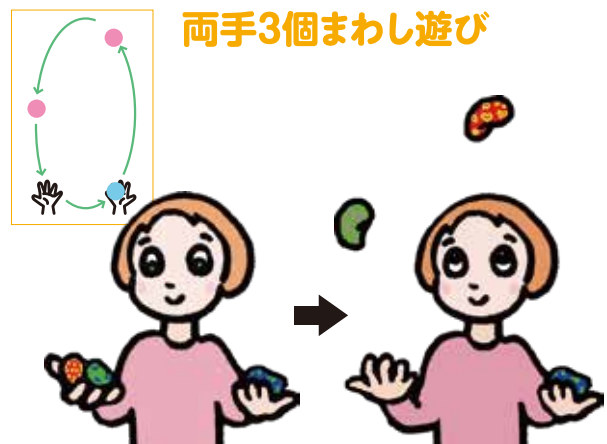
両手3個  
ジャグリング



両手2個遊び



両手3個まわし遊び



楽しいですよ!!

# ぜひおてだまサポーターになりましょう

『東京  おてだま』は、  
おてだまの魅力を伝える会です。



私たちはイベントを開催するだけでなく、  
施設を訪問したり、また日々、技術を磨いています。  
そして会で使用しているおてだまはすべて手作り。  
このおてだまづくりも会の大切な仕事です。



おてだまサポーター、募集しています。



『東京・おてだま』のおてだまは、赤・青・黄・黒・緑の  
ストライプに『日本お手玉の会』のキャラクター『た  
まちゃん』が入ったオリジナルデザイン。生地のカ  
断から縫製にいたる、すべてが会員の手作りです。

“おてだまサポーター”にご興味のある方は以下にご連絡をお願い致します。

ご連絡は『東京  おてだま』まで

<http://www.tokyootedama.jp/>